

最後のコラム

鮎川信夫遺稿集103篇

1979～1986

ic cooperation with export-oriented industries of Asian and developing countries. Hajime Yamura, who visited Indonesia, Malaysia and Thailand.

For its implementation, MITI has formulated a new economic cooperation plan dubbed a new AID (Asian Industries' Development) for direct investments, individual transfers.

In January, the plan was proposed to

Chinese Lab, Xerox Open Printing Center

PEKING (AP) — Xerox, the vice president of Xerox Corporation, a computer research and development company, and president of the company's Custom Systems Division, at opening ceremony. The facilities include a Xerox Chinese character electronic printing system capable of printing a Chinese text at up to 50 pages a minute, a laser

鮎川信夫

最後のコラム

遺稿コラム103篇

1979～1986

文藝春秋版

著者紹介 詩人・批評家。1920（大正9）年東京に生まる。早稲田大学英文科中退。予科在学中、同人誌「荒地」創刊。同誌はのちに戦後詩壇の大きな拠点となる。昭和17年応召、スマトラより傷病兵として帰還。療養中「戦中手記」執筆。戦後を代表する詩人として活躍、主な作品に「橋上の人」「繋船ホテルの朝の歌」「宿恋行」などがある。晩年は広い視野に立つ文明批評やコラムを執筆、「私のなかのアメリカ」（大和書房）、「時代を読む」（小社刊）など、同時代批評として類のない著書をあらわす。昭和61年10月急逝、享年66。脳出血であった。

最後のコラム

1987年3月15日 第1刷

1987年4月15日 第3刷

著者 あゆかわのよお
鮎川信夫

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23 電話03(265)1211(代)

定価 1200円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

©Fumiko Uemura 1987 Printed in Japan

ISBN4-16-341210-7

目次

署名入り寄贈本 13

怪談 18

少年非行と占領政策 23

デイズニールランド行 28

私の中のベースボール 33

健康法 37

大相撲寸感 42

ニューヨーカー、宮本美智子 46

*

反省なき社会 50

倒錯ジャーナリスト 53

一世二身 56

管理された生と死 59

全斗煥訪日 62

馴染んだ雑誌 65

保守の潮流 68

逆修正という偏向 71

車内暴力 74

農政過保護のシツペ返し 77

自由の選択 80

荒れる教室と文教賊 83

酒飲みはカッコ悪い 86

ロス疑惑とマスコミ 89

保守化する性意識 92

自殺したいじめられっ子 95

自殺と野蛮な神 98

子供の死の観念 101

老人大国の未来図 104

*

『暴走族のエスノグラフィー』 107

岩井克人『ヴェニス商人の資本論』 110

吉本隆明の『対幻想』 113

渋谷雅英『日本はアジアか』 116

民主主義は滅びるか？ 119

二刀流・宮本武蔵の兵法 122

実践書としての『五輪書』 125

発展途上国研修生の日本 128

S・キングの『キャリー』 131

『アホウドリの仕事大全』 134

堂々めぐりの『表と裏』 137

V9 投手・堀内の栄光 140

『人生と(上手に)つきあう法』 143

栗本慎一郎『鉄の処女』 146

伊藤憲一『国家と戦略』 149

都市空間としての東京 152

古森義久『ベトナム報道1300日』 155

加藤典洋『「アメリカ」の影』 158

「時間」の病いを逃れる法 161

森嶋通夫の学歴社会論 164

オルテガの『傍観者』 167

武田龍夫『白夜の国ぐに』 170

沢田研二『ジュリーの自伝』 173

『日本百年写真館(I・II)』 176

朝鮮出身の特攻隊員たち 179

R・カーヴァーの短篇 182

貧弱な『新人類の主張』 185

S・ターケル『よい戦争』 188

『奇跡のスーパー速読法』 191

M・デュラスの『愛人』 194

H・スタイン『大統領の経済学』 197

私立探偵の元祖ホームズ 200

登校拒否児の母の報告 203

ボルヘスの『不死の人』 206

期待はずれの「言葉」の本 209

石原慎太郎の文明論 212

ニクソンの米ソ首脳会談論 215

『金魂巻の謎』のリアリティ 218

山田詠美『ベッドタイムアイズ』 221

戸塚宏の『獄中記』 224

『半七捕物帳』の面白さ 227

すぐれた「いじめ」教育論 230

立花隆『論駁』の冴え 233

『世界が見える日本が見える』	236
「ニューズウィーク」日本版	239
丸山真男『「文明論之概略」を読む』	242
福沢諭吉のラジカリズム	245
『変体少女文字の研究』	248
堺屋太一の『知価革命』	251
イギリス保守主義の本領	254
『歴史的決断』の読み方	257
古井由吉『「私」という白道』	260
G・ギルダー『信念と腕力』	263
川上宗薫『死にたくない!』	266
山口瞳・赤木駿介『日本競馬論序説』	269

なぜ聖書の文語訳が良いか 272

名コラムニストの自伝 275

「イエスの方舟」の教義 278

マナー情報誌の流行 281

『ビゴー日本素描集』 284

真率な『シングル・ライフ』 287

「文士」はどこへいった？ 290

『国際紛争の読み方』 293

田中康夫のメッセージ 296

『アメリカ人の日本観』 299

『死をめぐる対話』 302

松本重治『昭和史への一証言』 305

バルザック『ジャーナリズム博物誌』 308

曾野綾子『ほんとうの話』 311

塩谷紘『「リーダイ」の死』 314

石山修武『笑う住宅』 317

アメリカ連邦議員選挙 320

*

泥の目 323

*

「時代を読む」眼 向井敏

最後のコラム

初出控

無印 週刊文春コラム「時代を読む」

* 世界週報コラム「メルクマール」

他 各文末に表記

署名入り寄贈本

(54・9)

四十年ほど昔のことである。東中野の川添町の通りに白紙堂という小さな古本屋があった。当時、早稲田の学生だった私は、よくその店に立寄ったものである。家が近かったせいもあるが、手狭なわりには珍しい文学書の初版本とか署名本、詩集その他、詩に関する書籍が多く並べてあって、意外な掘出物を発見することがあったからである。

同じ詩の雑誌の仲間である中桐雅夫や森川義信などと連れ立って覗いたこともあった。店内に入れば、どうしても真先に詩集の棚に眼が走る。今と違って好奇心が旺盛だったから、未見のものがあれば、早速手にとって頁を開いてみる。どんな詩集でも、十行か二十行、視線を辿らせれば、すっかり分ってしまうような気がしたのだが、そんな若さの特権で、白紙堂ではずいぶん勉強させてもらっていた。

ある日のこと、たまたま手にした未見の詩集を開いてみると、丸山薫に宛てた著者の署名本であった。それから、同じ棚の詩集を次々と見ていくと、丸山薫様、何某、と見返しの頁に署名した詩集が、かなりたくさんあることに驚かされた。一冊や二冊なら、何かの間違いで、古本屋の手に渡るといふこともありうるだろう。しかし、こうも大量では、や

はり本を贈られた人自身が、意図的に売払ったと考えるより仕方がないのである。

そのときは、かなりショックを受けた。『帆・ランブ・鷗』から想像される抒情詩人の人柄とは、およそかけ離れた不愉快な印象であった。

詩を書きはじめて間もない十代の正義感からすれば、心をこめて贈られた詩集を、そのまま売払ってしまうというのは、著者たちへの非礼であるばかりでなく、平気で売払う人間の神経に少しおかしいところがあるのではないかと疑われた。こんなふうに店頭で曝し物にされるのは、贈った著者たちにはさぞかし迷惑なことであろうし、贈られた者にとっても、外聞のいい話ではない。

その後、私も詩人のはしくれになり、著書を贈ったり贈られたりするような立場になったわけだが、求められた特別の場合のほかは、署名したりしない習慣が身についたのには、多分にこの時の経験が影響しているように思われるのである。

寄贈本をどう始末するかは、著作家にとって、けっこう厄介な問題である。丸山薫のように全部そのままにして売払ってしまうか、全部書庫に蔵いこんで外に出さないかを両極端として、そのどちらも不可能な者にとっては、中途半端なところで適当に折合いをつけて処分するより仕方がないわけである。

著者の署名のある本の見返しや扉の頁を切ったりして古本屋に売るのも、あまり後味のいいものではない。そうかと言って、廃本にしてしまうのは、勿体ない。貰ったものだから、どう始末しようと勝手なはずだが、二間か三間の小さな借家に住んでいて、日毎にう